

忘れられない 看護のエピソード

看護部門【最優秀賞】受賞

「戻ってきた笑顔」

びわこ学園医療福祉センター 草津
看護職 山岡 亜礼



看護師になって2年目の時、80代の男性患者Aさんを受け持つことになった。手足の痺れを訴え入院され、診断は頸椎椎間板ヘルニアだった。主治医から、症状が治るためには手術をするしかないと言われたが、もう高齢だから手術は絶対したくないと、保存的治療を選択された。

入院当初は杖をつきながら歩行され、トイレや更衣、食事など身の回りのことは全て自分でされていた。毎日奥さんがお見舞いに来られて、にこやかに会話をされていた。

しかし、日に日に手足の痺れは酷くなり、杖で歩行できていたのが、ウォーカー、車いすとなり、食事や更衣も奥さんや看護師の介助が必要となった。いつもにこやかだったAさんから徐々に笑顔がみられなくなっていった。

ある日Aさんが、日に日に状態が悪くなっていくことに対する不安な気持ちを話してくれた。この年で手術するのは気が進まない、でもこのまま症状が悪くなって今まで出来ていたことが出来なくなっていくのがつらいと。そして私に「もしも山岡さんがワシの立場だったらどうする？手術しようと思うか？」と聞いてきた。八十年代の男性の気持ちに置き換えて考えるのは難しく、どう答えたら良いのか悩んだ私は「Aさんの立場で考えるのは難しいけれど、もしも私がAさんの家族の立場だったら少しで

も良くなる可能性がある
あるなら手術をして
ほしいと思います」と
答えた。



翌日Aさんは、手術を希望すると主治医に伝え、手術のできる病院に転院することになった。その後Aさんの手術は無事に終わったのか、症状はよくなったのか、看護師として私のあの日の答えは正しかったのか、気になりながら日々の仕事に追われていた。

それから三カ月くらい経ったある日、詰所の前で「山岡さん」と誰かに声を掛けられた。振り返るとAさんが杖をついて笑顔で立っていた。「お陰様でこんなに歩けるようになりました。あの時、山岡さんの言葉を聞いて手術を決意してほんまに良かった。」と、Aさんが退院した報告に来てくれたのだ。久しぶりに見たAさんの立ち姿と笑顔に、私は胸が熱くなった。あの日の答えが正しかったのかは未だに分からないが、あの日以来「もしも自分の家族だったら」という視点で考えることが私の看護の原点となっている。

